

◎戦ひのあと

岩代須賀川町 服部水仙子

「お、寒む！」と誰やら。

さえ渡った月の夜の敷石に、駒下駄の音カラコロ。

「さよなら！」「左様なら」「や失敬」「失敬」門の前から二手に別れて、小石を叩く洋杖ステッキの音、規則正しい靴の鳴り。それもだん／＼と遠くなつて、一しきりの笑ひ聲が響いたあとは、もう全く聞えなくなつた。

送り出た玄關に月の影寒う、どこかの犬が頻りに吠えてゐる。何となく氣が抜けたやうな體の、足は向くともなしに今の十疊へ。取り残された火鉢が五つ、いづれも皆巻煙草のからがまるで林のやう。其一つを抱へて、頭痛すると一座にそむいた文雄さまが、頻りに灰に書いて居た字は何であつたか。火は皆形のまゝ白くなつてゐる。

重なつて、頹くずれて、横に縦に、亂れた歌留多に、盆を飛んだ南京豆のからがところ／＼。堆うすたがき蜜柑の皮を越えて向ふに一つ横はつてゐるのを手に取つて見ればこれやこの彈丸。花々しかった戦ひの面影は、私ですよいや僕のだの争に、身を犠牲の裂札二枚。

「はいよ！」味方の連戦連敗に日頃の負け嫌ひを、眞白な頬に赤く現はしてこゝを必死と奮戦の、富子さまがああ凍としたお聲。まだ此耳に残つてゐる。

さては破れ鐘のやうな聲はりあげて、讀みあげては、

一度にどつと笑はれて、すました顔の北村さま。まだ目に見えるやう。

茶の間の時計はチーンと一時を打つた。

淋しい当たりを見廻して、迫つてくるを覺えた寒さに、手近の火鉢をひき寄せようとした手先にカチリとふれた近眼鏡、一見して私は北村さまのといふことを知つた。鐵縁であるから、一寸かけて見ると、あたりのものが小さいやうな、大きいやうな、少しも判然としない、こんなものをかけて見えるのか知らずと立あはつて見たが、疊の面がでこぼこして、なんでも無いところをまたいだりする。そうだ此眼鏡をたゞは返されない、何ぞ趣向もがなと、一人で笑壺えつぼにいつてゐると、こちらに向いて来る足音が……と思ふ間もなく襖をガラリと兄様がお顔。「やあ……は……何だ其顔のさまは……」さう、私はまだお白粉の傷を洗はなかつたのでした。

【入力者注】

原文には傍点等がありますが、煩雜

を避けるために省略しました。

ルビは入力者の判断で付しました。

底本：「女子文壇」明治四十(1907)年第三卷第五號

テキスト入力：小林 徹

公開：令和三年三月十一日

改訂：令和四年二月三日

リンク：[水野仙子ホームページ](#)